

# 仏教は心の世界遺産 2

竹村 牧男・東洋大学学長

2014年11月25日  
NHKラジオ  
明日への言葉

小乗仏教は自分の問題の解決しか求めない。大乘仏教はそれを批判した。他者が苦しんでいる現実がある。他者の事を放っておいていいのか、そもそも自分の存在は他者とのかかわりの中に成立している。大乘仏教は自分とはもかく他者の苦しみを何とか救いたい、減らしたいと、他者も自分も同じように自分を越える仏の命からもたらされた命であり、他者が苦しんでいるのなら何とか他者の為に働いて行くと言う思い、行動がでてくる。

お釈迦様は紀元前383年に亡くなられた。 仏教文学「本生譚」如何に人のために身をささげたか、とかそういう話になっている。

その中の一つにずっと以前、お釈迦様はうさぎさんだった、と言う話がある。

かわうそとか仲間がいて、或る日 パラモンさんが来るので、供養しようとするための食べものを探してきましょうと言う事で、友だちはうまく探せて用意できたが、うさぎは探すことができなかった。パラモンさんが来た時に、うさぎさんは供養するものが見つかることができなかったので、焚火を用意して、その中に飛び込むので私の肉を食べてくださいと、飛び込んだという話がある。

実はうさぎはお釈迦様の過去生だった、パラモンは実は帝釈天という神様で、飛び込んだ瞬間に姿形を現わして、受け止めて、お前は大変良いことをした、お前の善行は長く世に伝えるてはいけない、月にお前の姿を書いておこうと、いうので月にうさぎがうつったという物語がある。

イエスは皆に代わって苦しみを受ける。代受苦 浄土教 阿彌陀様は皆を救いたいと、その為に一生懸命に、計りしれない長い間、苦行に苦行を重ねて仏になられて皆を救っている。皆は南無阿彌陀仏と唱えるだけで救われる。 一種の代受苦の思想。法華経の話の中の仏様にも、イエスの代受苦と似たような話がある。

仏教の一番根本は、無我 常住成る自我は存在しない。かけがえない命の働きはあると思うが、我々がしがみついている様な変わらない本体としての自分と言うものは無いという、無我の思想。無我と言うものを根本として、そこからあらゆるものを見てゆく、これは今後の時代を切り開く重要な原理になると、私などはそう思っている。

社会の仕組み成りたち、今非常に競争社会になっている。なんか追い立てられている。非常に行きすぎた個人主義に基づく競争原理がグローバルスタンダードとして世界を席卷しているのではないかとと思うが、東日本大震災などで再び自覚されたように、人間の絆は大事じゃないかと、人と人とのつながりからものを見てゆく、考えてゆく、繋がりの中で成立し得ている自己、他者も含めてそういう視点は或る種、無我の思想につながっている。

鈴木大拙は真空妙有と言う言葉を言っている。 空の中から尽きない、無限の働きがでてくる。 見返りを求めたり、手柄を立てて名誉を求めたりとかにとらわれない、ただ無心に働く。 やってやったんだから報酬をくれとか、ついそういう事になりがちだが、本当に純粹の働きではない。 見返りを求めたり手柄を立てて名誉を求めたりとかにとらわれない、ただ無心に働く。

本当の自由の働きでもない、自由はまさに本来の自己の働きとして行うところに自由があるわけでそういうところを重んじた。他者のことをよく考えながら、自己のことも考えてゆく。自分さえ成功すればいいと言うわけではない。

環境問題との関係から言えば、自然を大切にするとするか、自然と共生する事も大事ですが、環境問題は世代間倫理という問題を引き起こしていると思う。

我々の世代だけで環境、資源を消費しつくしていいのだろうか、未来世代の人たちに豊かな環境を残さなくていいのか、我々は未来世代の人のためにどう行動すべきか、考えないといけない。

現にいる他者のために何をするかと言う事だけではなくて、いまいないのだけれども、未来世代の人のために何をすべきかを、真剣に考えなければいけない。

人間と人間の、空間的なだけでなく、時間的な繋がり、眼に見えない絆、其れが根本にあるんだと、その中でどう考えるのか、と言う様な事につながると思うんです。

宗教はいろんな捉え方があると思うが、己事究明 己を究明する。

仏教はそこに多くの材料を提供していると思う。

一番根本のレベルは、生死の問題

社会的にいじめを受けて皆から無視されたとか、自己が絶對的に否定されたとか、言う様な局面も無いわけではない。

悩みにどう対処すればいいのか、教えてくれていると思うが、悩みの根源、そもそも自己とは何か、の解答を下さるのが仏教ではないでしょうか。

哲学としての仏教という側面があるわけです。

宗教としての仏教 倫理としての仏教 この三部作を書きたいと思っている。